
終わりなき進化

マイペース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりなき進化

【Zコード】

N6132Y

【作者名】

マイペース

【あらすじ】

目が覚めたらなんか液体がなみなみと詰ったカプセルの中にいた。……え!? どういうこと! ? 僕、死んだんじゃなかつたつけ! ?

この作品はシリアルス、ギャグ、ラブコメetcなどの成分配分は作者のその場の気分によって決定されます。よつて『考えるな……感じるんだ!』という漢気精神を持たない方は読むのをオススメしませんので、そのところをよろしくお願ひします。まあ、持つてい

ない方は、きっとこの物語を読めばゲットできると思うので、ぜひ
か一度お読みください。www

第1話 マッドとカプセルとハードボイルドから始まる新しい人生（前書き）

と、いうわけで、活動報告に書かせていただいたように、大改定して再投稿。たぶん、この前のはいけたんじゃないかなー、とうぐらいの出来にはなりました。

それでは、どうぞー！

第1話 マッドとカプセルとハードボイルドから始まる新しい人生

— Side 富士樹海 地下研究施設 ? ? ? ? —

あ……ありのまま今起こつたことを話すぜ！

『火事になつていた家から家族を助け出してそのまま死んだと思って、そして気がついたら、幼児体型になつていて、しかもドランボールでセルの幼体が入つてたようなカプセルの中にいた』

な……何を言つてゐるのか分からねーと思うが、俺も何が起きたのか分からなかつた……頭がどうにかなりそうだ……

輪廻転生とかタイム風呂敷とかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を「クハハハハ！ 遂に……遂に完成だ！」……ネタを途中でぶつた切られた……だと……？

「クク、愉快だ、實に愉快だ……これで我が悲願は成つた。これで、この私をコケにした全世界の愚民共にこの私の偉大さを見せ付けることが出来るのだ！ フウハハハハははハハはH A H A H A H A H A H A H A —————！」

あー……。自分が幼児になつてゐるうえに直ぐ傍で白衣着てるおつさんがイつちやつてる感じで高笑いをしてゐる。……何この状況、シユールすぎるんだが。

……まあ、それは置いといて今はとりあえず状況の整理をしよう。まず、俺は高校2年生の一般人。そこで今日はお気に入りの漫画の1つ『魔法先生ネギま！』の最新刊の発売日だつたんで買いに行き、無事に手に入つたので早く読もうと思い家に帰つたら、『あつはつ

は。見る、家がゴミのようだ!』な感じでキャンプファイヤー……じゃなくて火事になつてた。

「ははははは……つと、危ない危ない。一応は完成したとはいえ、このまま我が作品達を出してやるわけにはいかない。最終確認を早くしなければ……」

やつと高笑いをやめたと思つたら、今度は何かブツブツと言い出した。それが伸ばし放題の髪から覗く不気味に光る目や歪み過ぎていつそ裂けるんじゃねーの？ といつた感じの口元と粗まつてヒジヨーにキモい。

……と、今度は何かこっちに近づいてきて、俺が入ってるガブセルの前に設置されているキー・ボーダーらしきモノや、魔方陣のようなモノ。それに他にもよく分からぬモノを弄り始めた……ん？ 今俺は何を弄り始めた言つた？

マホージン！？ え、どういうこと！？ なに、もしかしてここは
何百年か先の未来がなんか！？ 実は俺は死んでなんかいないくて、
なんらかの方法で生きていってずっと復活の時を待っていたと「フ
フフ……」これで人類は21世紀を迎えることもないだろう。そう、
この私が王となって、新世纪、新世界としてこの星は生まれ変わる
のだ――――――！」 むしろ遡つていただどう！？

「ククク……しかし私は本当に素晴らしい。何せ、^{オーバーテクノロジー}未来の技術や超古代文明の技術を駆使し身体能力はもちろん、魔法使いとしても無敵の潜在能力。更に超能力の才能や、その他さまざまな潜在能力、そして神にすらなりえる潜在能力すらを持つ存在を5つも創つてしまうとは。……まあ、何故か1人だけ男になつていたのは失敗だつたが、それもよからう。大切なのは、これからのことだからな」

とうとう、魔法だの超能力だの言い出した。そして極め付けには神の力と来た。どうやらこのおっさん見た目以上に頭がイッちゃっているひとだつたらしい。……ん？ 5つ？ えーと、状況とこのマッドっぽいおっさんの言動から類推するに1人は俺のことだよな。じゃあ、あとの4人は？

そう思つていた所に、なんか都合よくカプセルが回転しだしたので、周囲を更によく見ることができた。

まず、いつたいどこまで広いのかといづくらいい、高く大きく薄暗いこの部屋。行つたことはないからよくわからんが、たぶん東京ドームなんか目じやないくらい広いんじゃないだろうか、これは。

次に、俺のカプセルにケーブルやら何やらで繋がつてているよく分からない機械。そしてなんか現代科学ではありえない感じの光の線で繋がつてている（よう見える）、よくわからない機械？ や、なんとも形容しがたい形の物体。

そして次に、古文書という形容詞が一番似合つ感じの古めかしい東洋系の本や西洋系の本でできたヒマラヤ山脈。なんか宝石とかでゴテゴテとした凄い高そうな本や、開いただけで呪われそうな禍々しい雰囲気を放つ本が混じつている。

更に次が……俺の左右に2つずつ置いてある、俺が入つてているのと同じようなカプセルに入つた4人の幼女達。ちなみに、何故女だと分かつたかというと……男ならついているべき、『約束された勝利の剣』がなかつたからだ。

え？ 変態？ ……ボクハヘンタイジャナイヨー、コレハアクマ

デグウゼンミエチャツタダケダヨー。

……しかし、周囲を見渡せたはいいが、むしろ余計にわけが分からなくなつた。どう見てもマッドっぽいおっさん。とてつもなく広く高く大きい薄暗い部屋。陳列された機械郡。てっぺんが見えないぐらい高く高く積み上げられた本の山^{ヒラヤ山脈}。そして極めつけに俺も含めた5人のカプセルに入った幼児達。……これはいつたいどういう状況だ。余りにシユールすぎる。なんで俺のような一般人高校生がこんなことに？

……でーか、意外と落ちついてんな、俺。……いや、これはあれだな。異常事態過ぎてむしろ逆に処理落ちして落ち着いてる感じだ。まあ、こうして落ち着いて状況確認ができるのはいいことなので、別にそれはいいか。

それにしても、5つのカプセルを弄りながらもさつきから1人だけ男がどうとかブツブツ言い続けているが、このおっさん。言っていることが本当なら、ナルホド、イカれてはいるが確かに天才だが、何故、男だとダメなのだろう？「くそ、この私の『光源氏ハーレム大作戦』これで君もモテないなんて言われない』『が……確かに世界征服のついでぐらいにしか考えてなかつたが、まさかこんなところで躊躇くとは……」このおっさん、ド変態でもあつたらしい。その才能とそこから来る情熱を向けるところを激しく間違えている気がするのは俺だけだろうか。

「まあ、いい。所詮はついでだ。この私の眞の目的……世界征服のためなら、この程度の失敗は許容しよう。……それに、まだ4人もいるからな。ククク、未来の私のリア充ぶりが目に浮かぶよつだ。フフフ、アーツハツハツハ！」

（イヤイヤ、まるで受け入れてねーじゃねーか！ つーかどんだけ

救いようがない変態なんだよアンタ！ しかもよく聞いたら世界征服とか言つてるし！）

……まあ、それは置いといつ。とりあえず今の俺の状況だが。体は子供、しかし精神はそのまま。これらのコトから考えるに……もしかしてあれだろ？ よくある一次創作でありがちな、転生とか憑依とか、そんな感じ。いや、俺、神様なんて存在に会つたことねーから、きっと憑依だろ？ いや、確かに最初は違うみたいこと言つていた気がするが、あれはボケだからいいんだよ。まあ、途中でぶつた切られたけど。

……え？ やけにあつさり結論を出すな？ あつさりつーか、もう面倒臭えーだよ、考へんのが。あれこれ考えるのは苦手じゃない、むしろ得意な方だが、好きというわけじゃないので、もうやめる、ウン。異論は一切認めん。

「……さて、これで最終調整も終わつた。……ククク、さあ！ 我が理想の世界への大1歩だ！ 田覓めよ、我が生涯最大の悲願、『プロメテウス・プロジェクト』の礎、『プロメテの子』等よー！
НАНАНАНАНАНАНАНАНАНАНАНАНАНА！」

また高笑いをしだした。そして、俺達のカプセルに満ちていた液体が抜けていき、完全に空になつたら今度はカプセルがゆっくりと上へと上がつていき、俺は外気へと晒された。と思つたら足元がフツカフカのベッドシーツ的なものに変わりそこに寝かされる。ていうか、どうやら俺……というか俺達は、なんかやたら壮大そうな悲願の礎としてこのおつさんに創られたらしい。まったくやる気が沸かないが。

だつてそうだろ？ ついさつき（少なくとも俺の記憶では）まだただの高校生だった俺が、急に世界征服とかありえないだろ？ 常識的に考えて。……まあ、この状況が既に常識からマツハ……イヤ、

光の速さぐらいで遠ざかつた場所にある気がするが。

う一む、しつかしにのおっさん、いつそ清清しいくらいに悪役だなあ。それもド3流の匂いがブンブンする感じの。さっきから思つていたが、言動の一つ一つまで死亡フラグを立てているようにしか聞こえないし。もしかしてワザとやつてんじゃねーのか。間違いなく正義の味方にあつけなくやられるだろ、コレ。

....ん？なんか床が光ってる？....魔方陣、か？しかし高笑いしまくつているおっさんは気づかない。いつたい、何が？

そして、魔方陣が一瞬更に激しく輝き、光が収まる

「お楽しみの最中すまないが、生贋、お前の野望とやらせり」「まだ」

ドゴオオオオオオオオン！――！――！――！

……へ？ こ、今度はいつたい何が！？ 何かスゲー音がしたか
と思ったらおっさんが吹っ飛んでいつたぞ！？ ホント、次から次

へと何なんだ！？

「グフツ。……な、何事だ！？ 侵入者か！？ ……つて、な、な
な、貴様は 」

吹っ飛ばされて機械の群れの1つにぶち当たったおっさんが、ぼ
ろぼろになりながらも慌てて起き上がり（と言つても超遅くだが）
周囲を見渡す。そして、魔方陣のあつた場所に立つていた人物を見
て驚愕……いや、戦慄していた。

俺も気になるが、流石に目覚めさせられたばかり、まったく体が
動かせない。どうしたものかと思つていると、おっさんがブチ当た
つたせいでブツ壊れた機械の破片がうまいこと鏡のようになつて、
おっさんの見ているほうが見えるようになつっていた。これ幸いと早
速見てみたら、そこには

咥え煙草に無精髪、そしてスージがやたらと似合つ、ハードボ
イルドなおっさんがいた。

……うん、見たところでサッパリ状況が掴めなかつた。とりあえ
ずおれに分かることはただ1つ。やつぱり、正義の味方が来たなー、
ということぐらいだつた。いや、まあこの咥え煙草のおっさんがそ
う名乗つたわけではないが、こう、客観的に見て、そう見えるとい

うだけだ。

……とりあえず、そろそろ、限界だ。処理落ちを更に超え、1周回った感じがする。つまり、俺のしたいことはただ一つ

（次から次へといつたいたなんなんだよおおおおおおおおおお…）

全力で叫ぶことだけだった（ただし脳内で）。

第1話 マッドとカプセルとハードボイルドから始まる新しい人生（後書き）

と、いうわけでここでいつたん切ります。フツフツフ、どうです？ 続きが気になる終わり方でしょ？ だから早く続きを読みたいと言う方は、バンバンお気に入り登録し、感想を俺にください。お気に入り登録をすれば次話更新がいち早く把握できますし、感想を書けば俺のやる気がHPして執筆スピードがあがるなど、いいコト尽くしですよ？

……え？ ほとんどお前しか得してないだろ？ イヤダナー、

ソンナコトアルワケナイジヤナイデスカー。

ちなみに、主人公はもちろんこの1人称語りの赤ん坊です。名前は後数話ほど投稿したら出すつもりです。

さて、今回はこの辺でお開きにしましょう。ではでは！

第2話 衝撃の事実判明。そして謎のオネーサン登場！（前書き）

あー……、やべー、スゲー眠いッス……。9時からぶつ通しで書いてたからなあ……

まあ、時間かけた分いい出来……かはわかりませんが、とりあえず、どうぞ。

第2話 衝撃の事実判明。そして謎のオネーサン登場！

— Side 富士樹海 地下研究施設 赤ん坊 —

前回のあらすじ！

家族を火事から助けて死んだ俺は、目が覚めたら何故か幼児体型になつて、力プセルの中に浮かんでいた！

そして、目の前には高笑いしている見るからにマッドサイエンティスト（ド変態）なおっさんが！

必死で状況を把握しようとしているが、床の魔方陣らしきものが光り輝き、そこからは薄く煙草を吹かす、ハードボイルドなオジサンが登場！

俺、余りに立て続けにわけが分からぬ状況が続き、大絶叫！

……うむ、とりあえず落ち着こうとこれまでの状況を整理してみようとかのあらすじっぽく纏めてみたが、やっぱりわけが分からん。むしろまた大絶叫しそうだぜ……

というか、マジでこのハードボイルドが服着て歩いているようなおっさんは誰なんだろ？。今もニヒルな笑みを口元に浮かべ、ブルブルと震えているマッドなおっさんを見つめているが、やっぱり悪者を倒しに来た正義の味方的な人なんだろうか、やっぱり。

「くっ、貴様、こつたいどうやつてここにたどり着いた！」ここに来るまでのルートには、百以上の魔法トラップが仕掛けたるはずなのに……！」

「……それは、私」

と、咥え煙草のおっさんの背後から小さな人影がゆっくりと出てきた。それは、オレンジ色の髪をリボンでツインテールに括り、右目が緑色、左目が青色の……つまりオッドアイのちんまりした幼女だった。

……？ 何だらつこの感じは。いや、なんか胸がモヤモヤする。うーん？ 何だらう、こづ、何と言つか、この幼女を見た瞬間に、既視感をこの幼女から感じたんだが。……いや、そんなはずはない。だつて俺はこの幼女どころか、オレンジ色の髪やオッドアイなんていう非現実的なものだつて見たこと無いハズだ。

「何を！？ そこの『無音拳』ならともかく、貴様のような小娘に我がトラップをどうこうされてたまるか！ 嘰らえ、『アイアム・グレイト・サイエンティスト！ 閻の精霊17柱、セブテンティキム・スピガタクウ集い来りて敵を射て！ 魔法の射手、連弾・闇の17矢！』」

と、なんかマジドのおっさんが幼女を怒鳴りつけたかと思つたら、やたら頭の悪そうな自画自賛の後、何か俺では理解できないじこかの言葉を発した。そして、その右手の平から複数の黒いビームのようなものが幼女に……え？ ビーム？

……つて、えええええ！？ 何、どういふこと…？ セつきから魔法トラップだと、その前には魔方陣みたいなものを弄つてたから、もしかしてこのおっさん魔法が使えんのかなー、魔法じゃなくても何かスゲー感じの力があるんだろうなーぐらいには思つたが、流石に手からビームは……つて、こんなことつている間に、

ビームが幼女に当たる！？ 危ない、早く逃げ！ 「……無駄、私は効かない」……え？

「な！？ 抵抗レジスト、イヤ、無効化サウザンド・マスターしただと！？」 そうか、貴様、『黄昏の姫巫女』か！ 『千の呪文の男』ナギ＝スプリングフィールド亡き後は『紅き翼』アラルブラの誰かと行動を共にしているらしいという話は耳にしていたが、まさか、ガトウ＝カグラ＝ヴァンテンバーグとはな……！」

……えーと、今なんか凄い単語がバンバン出てきたんですが。既視感の正体もバツチリ分かつた感じなんですが。……え、イヤ、でも、そんなのありえない。

イヤ待て、死んだ俺が赤ん坊になつてているといつこの状況。恐らくは二次創作でありがちな“転生、憑依”の類だ、と思つ。そして、さつきからマッシュのおっさんが使つてゐる魔法っぽいもの、その詠唱。これは殆ど意味が分からなかつたが、1部、『サギタ・マギカ』なんて単語には、よく考えたら聞き覚え……いや、読み覚えがある。

極め付けに、『オレンジ色の髪に右目が縁で左目が青のオッドアイの幼女』、『無音拳』、『黄昏の姫巫女』、『一千の呪文の男』ナギ＝スプリングフィールド、『紅き翼』、『ガトウ＝カグラ＝ヴァンテンバーグ』、などという妙に聞き覚え……イヤ、読み覚えのある単語の数々。

……もしかして、この世界つて「……違う。私の名前は『アスナ』＝ウエスペリーナ＝テオタナシア＝エンテオフュシア」……やつぱり、『魔法先生ネギま』かあああああああッ！……

「ぐ、やはりか。それなら魔法トラップも確かに……しかし、何故貴様等のような奴等が私の研究所に！？」

「そんなもん、ティーが『完全なる世界』の残党と繋がってるからに決まつてんじゃねーか。お前みたいな奴なら俺が来た時点で気づけそうなもんだがな、え？『狂氣の異端天才学者』アルバート＝ノイマン？」

……やはり、ここは『魔法先生ネギま！』の世界のようだ。といふことは、あの咥え煙草のおっさんは『無音拳』ガトウ＝カグラ＝ヴァンテンバーグ、向こうの幼女が神楽坂明日菜……いや、あの様子を見るに、まだ記憶を封印されてはいならしいから、『黄昏の姫巫女』アスナ＝ウェスペリーナ＝テオタナシア＝エンテオフュシア、ア、か。

しかし、ナギ＝スプリングフィールド亡き後。そしてガトウがまだ生きていて、アスナは記憶をまだ封印されていない、ねえ。

……また、随分と微妙な時期だな。原作の8～9年前といったところだらうか。ナルホド、アスナは麻帆良に来る前はこんなことをしてたのか。そりや記憶取り戻すにつれて強くなるはずだわ。……

てか、今ガトウはこのマッドのおっさん……アルバート＝ノイマンというらしいが、『完全なる世界』と繋がっているって言つてなかつたか？いいのかソレ……ってどう考へてもダメだろ。繋がりを持つてゐること、言い方を変えれば組織の一員ではないということ。でも、そんなノイマンでも『紅き翼』の誰かとアスナが一緒にいると知つてゐることは、組織の奴らは誰と一緒にいるかぐらい知つてもおかしくない。

……うん、やっぱりダメだろ絶対。いつたいいつ狙われるか分かつたもんじゃな……ふ、フハハハハ！……おっと、いかん。つい思考に没頭してたらしい。

しかし、一体なんだ？ノイマンがまた高笑いをし始めたんだが。

「何だ？何がそんなにおかしい」

「ククク……、イヤ、何も焦る必要などなかつた」と思い出して
ね？　君達程度では、どうせやつたつて私の野望を止めね」
「ないよ、ククククク……」

「ほおー、何故だ？」

それは確かに気になる。さつさまであんなにブルブル震えてたくせに、急に落ち着き、余裕の態度になるとはどうこうことなんだろう?

「フ、何、私の力は魔法だけではないということを。そう！この研究所には魔法以外にも様々な力による仕掛けをしてあるのだ！フハハハハ！　さあ、目覚めよ『おーい、終わったわよー！』……は？」

「ニヤー、バーバーバーバーた。超高速電磁誘導弾や、なんか由く濁つてのームやら、ほかにも一杯あつてやー。ま、アトワクショソとしてはなかなかだつたけど」

「イヤイヤ千歌さん、貴女ビームビームかむしろ凄くたのしんでたじゃないですか。あと、あんな物凄いトラップをアトラクション呼ばわりできるのは貴女だけですよ……」

「な、なななななななななな——！——！——！——！——？」

余裕で何かを語つっていたノイマンだったが、ガトウとアスナが出て来た魔方陣とはまた別の陣から出て来た2人の人物……正確には片方の人物を見てその顔をポカーンとした間抜け面にしたかと思うたら、むしろさつきよりヒドイ感じで取り乱し始めた。

ちなみにその2人の容姿だが……1人はスーツを着た、ガトウと

比べるといくらか青臭い感じを受ける青年。おそれく、若き日のタカミチ＝ト＝高畠だらつ。

そして、もう1人だが……こちらは女性。長く腰あたりまで伸びた艶やかな黒髪に明るい赤色のライダースーツ、そして顔には快活な笑顔が浮かんだ、何と言つか、『姉御』や『姫さん』という言葉がとてもよく似合いそうな美女だ。……それも、絶世の、というレベルの。……誰だ？こんなキャラ出てたつけ？

「おう、千歌。どうだつたんだ、首尾は？」

「ん？ ああ、ちゃんと研究資料やら機材やらなんかはゼーんぶ影の倉庫に入ってきたわよ。後はこの部屋での最後ね」

「や、やはり貴様は『千の呪文の男』の師にして、『紅き翼』の紅一点、『戦場の紅き閃光』と謳われた、あの四季千歌か！？」

「当つたりー そう、アタシはアンタの言つてる四季千歌で間違いないわよ」

……え？ マジで誰、この人？ つか、『紅き翼』に女つていたか？ イヤ、いなかつたはずだ。……じゃあ、この美人のオネーサンはいつたい……？

「そ、それに私のトラップを突破しただと！？ そんなバカな！ アレらは私がこの子等を創る過程で得た知識を総動員した非の打ち所の無いトラップのト「あー、ちょっと黙つててくんない？」つておい！ わ、私の研究機材や資料を影の倉庫に入れるな！ つて、ああ、凄い速さで吸い込まれていく！？ おい、やめ「ハイ、しゅーりょー」……。」

と、俺がこのオネーサンの正体について疑問を募らせていく内に、この部屋にあつた俺達幼児の入つた5つのカプセル以外は全て、オネーサンの足元の影に凄まじい速さで吸い込まれてしまった。……あれだけ「ゴチャゴチャしていた空間が、今や360度スッキリとした更地になつてしまつた。そしてノイマンは、余りにショックだったのか跪いて。」とポーズをとつている。

「クソッ、クソクソクソクソ！ この私の野望がこんなところで潰えるなんて、そんなことがあつてたまるか！ こうなつたら「さて、あとは最後の仕上げね。ガトウ、タカミチとアスナちゃん連れて先行つて」……何？」

「ああ、分かつた。きつちり始末を付けてから来いよ」

「……千歌さん、頼んだのは私なんだから、私も最後まで……」

「いーのよ、アスナちゃん。確かに私がここと一緒に来たのはアスナちゃんにお願いされたからだけど、こいつに關してはアタシも結構怒つてんの。だから、ね？」

「……うん、わかつた」

そんな会話の後、千歌さんとやらを残し、ガトウとアスナ、それにタカミチは、ガトウ達が来た魔方陣から出て行つた。

その途端……千歌さんは先ほどまでの快活な表情とは一転、いつも冷たささえ感じるほどの無表情になつた。そしてその身からオーラのようなものが迸り、同時に、凄まじい殺気を……そう、正に殺氣と呼ぶに相応しいであろうモノを醸し出したのを感じた。

「ヒツ！？ な、何をするつもりだ！？」

「何つて、決まつてんじやない。アンタを殺すのよ」

……殺す。確かにこの女性はそう言っていた。そして俺は……余りに濃密な殺氣から、この言葉はさうと嘘ではないと直感し、震えていた。

言われた当事者であるノイマンは、今までの震えがたいしたこと無かつたように見えるほどガタガタブルブルと震えだしている。

「な、何故だ！？ 貴様にそんな権利はないだろ？ が！ この私が何をやろうと、私の勝手ではないか！」

「そうね、それは確かにそのとおりだわ。でもね、それこそそんなこという資格はアンタにはないわよ。自分の欲のためだけに数千の人達を誘拐し、その人達を使って実験、なんてことをしていたアンタにはね。それとも何、ジョークのつもりかしら？ だったらやめときなさい。センスが無いを通り越して反吐が出るわ」

……相当ヤバい奴だとは思つていたが、千歌さんの話が本当なら、こいつは相当イカれているようだ。というか、数千人もの人達で実験つて……俺達を創るためだよな、間違いなく。……ええい、今考えてもしかない、そういう暗い話は後で考えよう。とりあえず今はこの状況の行く末を見守るとしよう。

「グググ。そ、そうだ、我が野望が成就した暁には、貴様に世界の半分をやろうではないか、どう？ もつ、目障りよ。死になさい」
……がはッ！ も、あれ……ま……

そして、ノイマンは何を血迷ったのか千歌さんを仲間に引き入れようとするようなことを言い出しだが。が、千歌さんは途中で遮り、

一瞬で消えたと思つたら、次の瞬間には千歌さんの右手がノイマンの胸に突き刺さっていた。

……胸を刺されたノイマンは、口から凄い量の血を吐き出した後、何も喋らなくなり、千歌さんが手を抜いたら、そのまま床に崩れ落ちて、しばらく痙攣した後、動かなくなつた。

俺は……わけが分からなくなつていた、といつのが一番正しい。恐怖とかそういうもの以前に、この日の前の光景が、現実のモノとして認識出来ずにはいる、そんな感じだ。……いや、もしかしたらワザと認識しないように防衛本能的なものが働いたのかもしれないが。そりやあそだ、一般高校生たる俺が数瞬前まで普通に喋っていた人間　たとえソレがどんな悪人だろうが、思い入れが無い相手だろうが　が死んだという事実を普通に受け入れられるなんてわけがないのだから。

「これで終わり、か。……ああ、ごめんねボク、どうも君達を動かそうとしてみてもまったく動かせないもんだったから。嫌なモン、見せちゃつたわね」

そして、腕に付いた血を吹き飛ばしたかと思つたら、急に俺の方を向いて話しかけてきた。どうやら、俺が起きている事に気づいていたようだ。と、こちらに近づいてきて、カブセルに軽く触れてきた。

「ふむ、やつぱり「イツが死ぬと動かせる仕組みになつてたのね。……で、行きましょう。こんな陰気なトコはさうとおさらばするに限るわ」

そうして千歌さんは俺を抱き上げ、他の4人の幼女を何か（多分、魔法だろう）で浮かせて、ガトウ達が出て行つた魔方陣から俺達を連れて出て行つた。

…… とりあえず一つ、 疑問をば。

俺つひこれからいつたい、 どうなるんでしようか。

第2話 衝撃の事実判明。そして謎のオネーサン登場！（後書き）

うーむ、キャラの口調つて難しいなあ。特にガトウ。原作でも台詞が少ないから、喋り方がよくわからん。タカミチも若い頃と原作期とで喋り方が若干違つたりするし。

おつと、伝え忘れるところでした。主人公が今の時点で赤ん坊だと、これから物語を進めていくうえでかなり無理があるということに気づいたので、現時点での年齢は5～6歳程度とします。

あ、後、眠いのに無理して書いたので変なこと書いてあるかもしがれませんが、あつたらそれは後でキッチリ直しておきますのでご安心を。

さて、それでは今回はこの辺でそろそろ。お気に入り登録に感想、面白いと思った方はバンバンやってくださいね！ ではでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6132y/>

終わりなき進化

2011年11月20日00時09分発行